



目指すは “ 都市と自然のビオトープ・ネットワーク ”

記者：榎本幸実（日本ビオトープ管理士会徳島支部代表）

【活動における現状の課題と今後の展望】

はじめに

徳島支部は、会員相互の情報交換と研鑽を目的とした定例会を中心に、会員個々の得意分野における仕事や社会活動を通じて、「自然と共存する美しいふるさと」の実現につながる活動やその支援に取り組んでいます。

現在のところ、自主事業を積極的に推進する体制にはありませんが、様々な主体が取り組むビオトープ関連の事業や活動における支援をふりかえり、連携における現状の課題と今後の展望を以下ご紹介します。

1. 地域との連携

地域のNPO団体との交流や連携に努め、ビオトープ活動の情報交換を図っています。

(1) 現状の課題

地域での日常的な活動は、維持管理に止まっていることが多く、地域の子どもたちや周辺住民の参加を願いつつも、利活用というソフト面の体制が充分でない実情があります。当会としては、現在のところ、活動団体からの相談や依頼を受けての活動に止まっていることから、積極的にアプローチしていく必要があります。

(2) 今後の展望

環境問題への関心の高まりから、様々な主体による環境保全活動が活発化しています。しかし、個々の思いや恣意的判断あるいは善意の誤解による活動も少なくありません。このことから、地域におけるビオトープ活動の情報収集に努め、様々な主体との交流や連携によって相互に活動の充実を図り、人のネットワークとビオトープ・ネットワークの普及に努めます。



地域活動団体との交流会



地域の自然環境調査の支援

2. 企業との連携

県内企業のビオトープ活動において、環境経営やCSR活動の充実を支援しています。企業の経営理念とともに、工場の整備と運営のテーマの具現化を図り、その利活用を通して地域へと展開されることを期待しています。

(1) 現状の課題

一般の団体や学校等の工場見学を受け入れている例が多く、安全対策にも十分な配慮が求められ、適切な管理と指導とともに、土地利用における保全と利活用の機能区分を明確にする必要があります。また、PDCA サイクルによる継続的改善も重要です。

(2) 今後の展望

企業と消費者の環境コミュニケーションはもとより、職員とその家族、地域の学校や自治体との連携によって地域の環境保全活動へと展開することが期待されます。このことから、活用のプログラム策定や各主体間のコーディネート役として支援できるような体制づくりに努めます。



改良構想立案のワークショップ運営



学校ビオトープの学習会支援

3. 学校との連携

小学校を中心に、中学校、高等学校、保育所などにおける学校ビオトープ活動に関わり、学習会をはじめ、調査、計画、設計、施工、維持、利活用等の各段階における支援(助言)を行っています。

(1) 現状の課題

学校ビオトープの担当教員や活動の対象学年が特定されている場合が多く、また、「つくる」ことに熱心になる反面、維持管理や利活用の計画が不十分なままになる場合も見られます。どの学校にも共通して、「つくる」ことよりも「いかす」ための学習計画や「活用と継続」の体制づくりが必要となっています。

(2) 今後の展望

学校ビオトープを作業活動や自然観察の体験場に止めることなく、様々な教科の実体験の場や学校生活の日常的な活動空間として位置づけ、PTAはじめ、地域の住民や団体との連携によって継続的な発展を図る必要があります。このことから、年間の授業計画に組み入れ、全学年を対象に発達段階に応じた取組を計画的に行うことが可能となるよう、適切な活用プログラムの開発と提案に努めます。



学校ビオトープづくりの支援



学校ビオトープ維持管理支援

4. 行政との連携

ビオトープの保全と創出の推進を目的とした「徳島県ビオトープ・アドバイザー派遣制度」において、行政との連携によるビオトープ活動の普及とその支援を行っています。

(1) 現状の課題

17名のアドバイザーの内、管理士が5名登録されています。5名あわせて年間5回程度の要請を受けていますが、活動内容に偏りがあり、地域活動への「生物多様性や生態系保全」に関する一層の普及啓発が必要となっています。



教職員研修会の企画運営

**(2) 今後の展望**

地域における様々な環境保全活動や事業において、生物多様性や生態系保全の視点から、ビオトープの正しい理解と身近な自然の保護・保全の普及啓発とともに、環境教育や自然体験学習の機会と捉え、その推進に努めます。

**おわりに**

会員は、地域活動家、行政職員、調査分析・計画・設計・施工・管理・利活用等の各専門家など、多様な職能を有するメンバーで構成しており、様々な場面で地域に貢献できると自負しています。しかしながら、経済的・時間的制約から、会員間の情報交換と単発・突発的な依頼による活動に止まっているのが現状です。

今後は、社会活動への一層の参加はもとより、ビオトープの保全や整備に関する事業において、各会員の専門性が発揮できる場や機会を増やすことが課題と考えています。このことから、従前の会員自らの研鑽を主とした活動の充実とともに資金調達も図りつつ、多様な主体との連携や協働による計画的・継続的な活動への展開に努めます。

**ビオトープ・サロン 会員紹介コーナー**

記者：編集担当

道路や河川工事でのビオトープ保全・創出がご専門の「丸岡次郎さん」から原稿を寄せていただきました。

**【丸岡次郎（マルオカジロウ）のプロフィール】**

生まれ：三好郡三好町（現在東みよし町）昼間 現住所：徳島市名東町一丁目

好きなこと：読書（範囲：何でも）/最近は目が弱くなり釣行は極減傾向

嫌いなこと：名前（長男にも係わらず次）/人ごみ 厭なこと：目の衰え/記憶力の衰え（歳のせい!?!）

同居家族：人間 女性二名/雌犬一匹：大型犬（体重 27kg「私は犬である」と思っている犬）/メス一名：

小型犬（体重 3kg「私は犬である」と思っていない犬）

今興味を持っている事：気象事象

次回の会員紹介は、ミティゲーションに関心が高い「玉岡直子さん」につなぎます。

**ビオトープ・サロン 書籍紹介コーナー**

記者：犬伏潔（会員）

ビオトープ管理士が著作した本の紹介です。まちづくりやビオトープに関する行政や計画・設計・施工・管理に携わる方々、自然と共存する暮らしに関心を寄せる皆様にとって、よき手本となると思いますのでご紹介します。

**【地球と暮らすまちづくり スイス・ドイツに学ぶ近自然】**

著者：長谷川明子（1級ビオトープ計画管理士/名古屋大学大学院生命農学研究科動物生産科学第1研究室）

発行：技報堂出版/A5判・176頁/定価：2,310円（税込み）

内容：第1章 深刻化する地球環境/第2章 スイス・ドイツの環境政策/第3章 都市と農村/第4章 ゴミと下水道/第5章 道路と鉄道/第6章 川と湖/第7章 豊かな未来のために

**【ビオトープブック 生物多様性保全の科学と政策】**

著者：小杉山晃一（1級ビオトープ計画管理士/ビオトープ管理士セミナー講師/富士常葉大学・大学院准教授）

発行：学報社/B5判・160頁 2色刷/定価：1,890円（税込み）/ビオトープ管理士資格試験 参考図書

内容：第1章 生物多様性の縮小/第2章 生物多様性の評価と保全/第3章 生物が多様であることの意義/第4章 生息環境の多様性と生物の多様性/巻末資料 絶滅危惧種全リスト・特定外来生物全リスト・希少動植物全リスト・自然環境保全地域一覧・ホットスポット/ラムサール登録地/国立・国定公園

**ビオトープ・ナビ Q&Aコーナー**

記者：犬伏潔（会員）

**【Q（質問）Mさん】**

里山が荒れていると言いますが、本来の自然に戻っていても聞きます。里山はなぜ必要なのですか？

**【A（回答）攪乱の代償地に依存する種のビオトープ】**

難問です。限られた紙面での回答は避けたいですが、端的には地球規模の環境問題として、生態系の質的低下や破壊の問題があり、その代表として「地球温暖化」と「野生生物絶滅」があげられます。そして、絶滅の危機にある種の約半数が二次的自然（雑木林・茅場・溜池・土水路・水田）、つまり里地里山を生活の場としており、この環境の変化（遷移）や消失が絶滅に直結することから、里山の環境を維持する必要があると言えます。

詳しくは、最終氷河期後の自然史から紐解くと理解しやすいかもしれませんが、興味があれば、守山弘著の「自然を守るとはどういうことか」や「水田を守るとはどういうことか」の一読をお勧めします。

**ビオトープ・ナビ 雑学コーナー**

記者：樫本幸実（会員）

**【スプリング・エフェメラル】**

春の里山の林床には「春植物」が可憐な花を咲かせます。これらの植物と同様に春先のみ成虫が出現する昆虫（主にチョウを指す）とともに、スプリング・エフェメラルと呼ばれ、語意の「春先のはかない命」と可憐な姿から「春の妖精」とも呼ばれます。代表的な種には、フクジュソウやカタクリ、ギフチョウやウスバアゲハがあげられます。これらの種は、氷河期の遺存種と言われ、温帯の落葉広葉樹林帯のほか、照葉樹林帯でも攪乱が繰り返される氾濫原や扇状地、農用林や薪炭林が維持されてきた里地里山の落葉広葉樹林で命をつないできました。

この落葉広葉樹林は、開発による消失をはじめ、治山・治水による自然的攪乱の減少、生活様式の変化や農業の近代化による人為的攪乱の減少などにより、本来の照葉樹林へと遷移が進行し減少しています。これらのビオトープに依存する様々な生物が生き続けられるためには、身近な自然と人との新たな関わりが必要となっています。

**編集後記**

文科省の小中学校施設整備指針について「自然との触れ合い」や「地域や保護者との連携」などの方向で改定する考えが示されました。学校ビオトープは双方の方向に寄与する施設として、大いに期待されます！ 編集：樫本幸実